

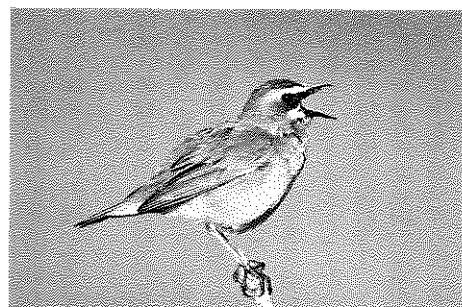
のがカメラとの初めての出会いだつた。

その後生徒監に印画紙の現像まで教えた。今でも我が家に暗室は残つてゐるがすでに位置小屋になつてゐる。戦後からカメラ歴は長く黒い冠布を頭から被つて撮る大型のフィルムカメラからデジカメ等書扇の一隅を占拠してゐる。専ら花の接写や風景写真を撮つていたが野鳥撮影の歴史は意外と浅く、のめり込み始めたのは数年前。望遠レンズの底なし沼に

嵌まり通称ハチゴロウ（800mm/F5・6）のレンズまで買つてしまふ。当然鳥撮影が楽しくなる。しかし体力の衰えには逆らえず今は重機並みのカメラは息子に持たせ、こちらは軽機械のカメラで対応している。

私にとつて今まで鳥撮影の中で感動した瞬間は何度もあつたが、その中でも更に強烈に脳裏に焼き付いている光景がある。前もつて重い機材は船便で送る。また、初めての土地に行く時は専門のガイドを利用する。ある年の5月息子夫婦と石垣島に行き馴染みのガイドとアカシヨーピンを撮影した時の事である。薄暗い林の中でアカシヨウビン独特のヒュヒヨロロと云う鳴き声が聞こえる。静かに見ているとやがて目の前の木の枝に姿を見せる。まるで朱色の宝石だ。機関銃のように連写モードでシャッターを押し続ける。満足する位撮影してからガイドパレットを渡され千早城など撮影した

を変えた。そこで見たアカシヨウビンはまだ模様で非常に珍しい貴重な個体らしいが一瞬夢か幻か天国に居るのではないかと思う程の美しさで、しかも間近にじっと動かず枝に止まつてくれた。僕とは正にこういう事がと暫く興奮した気持ちは落ち着かなかつた。（続く）左の写真はノゴマです。



## 五十九期（士59期 経859期）

担当者  
神保 明生

湯澤典男（29／3・通信）

私と写真